

古典文法トレーニング 長文課題 品詞分解と現代語訳

大問一（出典：『閑居友』）

◎品詞分解（非活用語は初出のみで、名詞は基本的に非表示。同色の助詞は同内容であることを示す。）

昔、賢ク・体き人ありラ変・用過去・終き。未副た家ラ変・用過去・体にありけるとシク・用き、いみじく小鳥格助サ変・用接助ハ四・用過去・体格助を愛して飼ひけるが、一籠ラ下二・用に山雀ラ下二・用二つ入れたりける存続・用過去・体接助（偶然）に、一つ格助（体修）の山雀係助は、ものも食係助ハ四・未接助は、常副には籠係助の胸はらにつカ四・用きて、籠格助ダ下二・未意志・終格助副助サ変・用の目より出でむ紅とのみして、瘦サ下二・用ラ四・用せ細りて水副助（擬推）だにも多ク・用係助マ四・未くは飲マ四・未まて、出でむサ変・体とする営副みのほ副（呼）か、さらク・終にことわざなし。いま一つ副の山雀、ものいみじく食マ四・用ラ四・已存続・終ひて、勇み誇サ下二・用れり。身も肥え太りてぞありける過去・体（係結）。さるほど副に、この瘦存続・体せたる山雀、いたく身も細りて、い疑かがしサ変・用完了・用過原・体たりけむ、籠係助の目より抜カ下二・用ダ下二・用け出でて、飛バ四・用びて去りぬ。これをマ上二・用見て、その主係助の男、されラ変・已接助（順推）ク・体ば憂意志・終き世マ四・未を出でむラ変・体当然・体断定・用係助丁（作し態）と営係助ラ変・体適・体懸まむ人も、さるべき推定・已にこそ侍接頭ラ四・用る（※1）めれ。常接頭ラ四・用にうちしめりて、高ク・用き笑サ変・未打消・用ひもせず、心副助思ハ四・未ひにも係助ラ変・体適・体懸ものなども食係助ラ変・体適・体懸はてこそあるべ推定・已かめれラ四・用と悟りて、やがて頭サ四・用下ろして、いみじく行シク・用ハ四・用ひて侍丁（作し態）り。

※1…本来ならば「主」からの敬意であるが、その場合、敬意の対象を想定できない。この本文のの前後を読むに、「尊き聖」の言を別の「聖」が引いて語っている箇所とわかるので、これは語り手の聖が聞き手に対して敬意を表明するために付け加えたと考える。

◎現代語訳（↓『ステップアップノート30 古典文法トレーニング』参照）